

日本語教育の質向上目指し全国初の教員研修会を開催

J a L S A 主催による第 1 回教員研修会を滋賀県長浜市で実施

◆ 34 校 65 名の役職員・先生方の参加者を得て実施

留学生に対する「日本語教育の質の向上」が求められて久しいが、全国日本語学校連合会（J a L S A）が、初の試みとして「第 1 回教員研修会」を、今年（2017 年）7 月 31 日（月）、8 月 1 日（火）の 2 日間にわたり、滋賀県長浜市内で 34 校 65 名の参加者を得て開催した。今回の教員研修会では、日本語教育の要である「学習意欲をいかに高めるか」に焦点を絞り、講師に高等教育、教育心理学、心理統計学がご専門の栗田佳代子・東京大学総合教育研究センター准教授と、教育学、高等教育がご専門の吉田壘・東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門特任助教のお二人を迎えして、講義と、ディスカッション重視のワークショップ（体験型講座）形式で研修会を行った。

その結果、議論が充実し「初回の授業の大切さ」「授業内容を適切なレベルに設定することの大切さ」など実行可能な工夫が様々見つかかり、研修後のアンケートでは「研修会は大変有意義だった。今後も継続して欲しい」など次回開催への期待が多かった。以下に詳しい「第 1 回教員研修」内容をお伝えする。

◆ 「教員研修実行委員会」立ち上げ、アンケート採り入念に準備 学生の学習意欲の向上と教員の効果的な指導法をテーマに選ぶ

日本語学校初の教員研修会開催の試みを有意義なものとするために、J a L S A は、今年初めに「教員研修実行委員会」を立ち上げた。実行委員長に翰林日本語学院（横浜市）の長岡博司校長、副委員長に神戸住吉国際日本語学校（神戸市）の若林芳子理事長、各実行委員に J a L S A 会員の日本語学校の先生方と J a L S A 事務局員ら計 6 名で研修の進め方を研究し、会員の日本語学校の先生方にアンケートを取った。

それを回収して「J a L S A 教員研修会のためのアンケート調査結果」にまとめ、会場で配った。まず全体を把握するために第 1 番目に「日本語学校内での問題点」を挙げた。回答の多い順から言うと、①カリキュラム・クラス設定、②日本語習熟度、③授業態度・生活面、④卒業後の進路—などだった。上記についての回答を漢字圏、非漢字圏別に問題点をまとめると共に、特に「日本語学校入学前からの問題と考えられる点」の回答を別表として紹介した。

第2番目は「授業における問題点や改善点」だが、①漢字・語彙の授業、②文法、③読解、④聴解、⑤発音、⑥会話、⑦日本語能力試験対策、⑧日本語留学試験対策、⑨大学入試小論文・面接対策、⑩大学院入試小論文・面接対策、⑪その他一の項目が上がり、項目ごとに「問題点」と「改善点」別に回答を整理した。

第3番目は「授業以外の問題点」で、①教員の募集・新人教員への指導について、②教員同士のチームワーク・連携などの人間関係について、③在留資格・入管法等に対する知識、④ICTの活用について、⑤進学指導に関する事、⑥就職を希望する学生への指導に関する事、⑦学生への生活指導・コミュニケーションについて、⑧教材に関する事、⑨その他——と、回答は多岐に渡ったが、それだけ、今回の調査結果は、先生にとっては授業を充実させる貴重な資料となっている。

「教員研修実行委員会」は、このアンケート調査に基づき研修日程やテーマ及び講師の人選と研修会のテーマを絞った結果、①学生の学習意欲を高めること、②教員の効果的な指導法の問題——をテーマに選んだ。その結果、「モチベーションの理論の理解と活用を通じたクラスデザインの改善」方法に明るい東京大学の栗田准教授、並びに吉田特任助教に講師をお願いして、お越しいただいた。

◆「学習意欲を高めるための基礎理論」—栗田佳代子・東大准教授

研修会場は、滋賀県の北東部・湖北地方に位置する長浜市内の長浜ロイヤルホテル。中心市街は羽柴秀吉が築いた長浜城の城下町だったところだ。

まず1日目の研修会の開催に当たり、長岡実行委員長は「ここに来ている皆様方が留学生に係る時間が1番長い。従って先生方の成長が留学生の成長、一歩前進につながります。親日、知日にもつながります。皆様方(の姿勢、やる気)がすごく大事です」と研修参加者を激励して研修に入った。研修は栗田先生作成の講座「学習意欲を高めるための基礎理論」から始まり、次いで吉田先生作成の講座「学習意欲を高めるためのクラスデザインの検討」へと移り、それぞれプロジェクターでスクリーンに講座内容を投影しながら研修を進めた。

栗田先生は冒頭、「授業で『学生がやる気がない』という先生がいるが、これは教員の責任です。『学生が悪い』ではなく、こちら側が常に気をつけないといけない」と指摘して研修を始めた。学習意欲を高める基礎として紹介された「期待価値理論と環境」の考えにしたがい、留学生の「モチベーション(動機づけ、目的意識)の喚起・向上・維持」を目的として、「他者の授業の改善案を挙げられること」、同様に「自身の授業の改善点を挙げられる」ことを目指して研修が進められた。

◆モチベーションの喚起と維持は重要かつ必須

この考えの「大前提」となるものとして、栗田先生が挙げたのは、学生が主体的に学んでいくためには「モチベーションの喚起と維持は重要かつ必須」との指摘だ。先生がここで言うモチベーションとは「学ぼうとすることがらを生み出し、方向づけ、維持する」ことと説明された。

ここで「モチベーションのモデル」の図式が画面で紹介された。すなわち<期待>と<価値>の二要素から<モチベーション>は構成され、モチベーションが<目標に向かう行動>を生み出し、その結果<学習と成果>を生み出す一という流れだ。これらの要素は<環境>と記された地に布置されており、<環境>については後に説明があった。この場合の<期待 (Expectancy)>とは、「結果や効力を生み出す目標を達成できるのか？」など「目標達成の主観的な確率」を指す概念だ。

ここで、画面を通して「覚えなくてはいけない漢字が多すぎるので、自分にはできそうにない」と途方にくれている学生に対して、『授業のなかでどのようにサポートしますか?』と、会場のグループ別に分かれた日本語学校の先生方に問いかけが行なわれた。最初は1人で、次いでペアで「対応を考えて下さい」と議論が進められ、最後に互いに発言して出た考えを発表しあい、栗田先生は「全体で共有」する方向へと会場の先生方を導いた。

その上で栗田先生は、<期待>については、改めて「授業を通して目標達成が(期待)できそうか?」ということだと画面で示しながらも「期待が低すぎる」留学生の場合は、「授業内容が難しすぎるとモチベーション低下」となり、「期待が高すぎる」留学生の場合は、「授業内容が簡単すぎるとモチベーション低下」を来す、と注意を画面上で促した。

その上で栗田先生は「期待を高める方法」として、次の4点をあげた。①「目標、授業内容、評価を調和させる」。②「授業内容の適切なレベルを見極める」。つまり「ジャンプすれば届く」難易度に設定」すること。③「的確なフィードバック」。④「効果的な学習方法を説明する」。会場の参加者の誰もが、ここではメモを取って真剣に取り組んでいた。

◆授業価値を生み出す「達成価値」「内発的価値」「道具的価値」

次に栗田先生の講義は、<期待と価値>の<価値 (Value)>の説明に移った。つまり「授業にどれだけ価値を見出せるか?」ということだが、以下の3点を挙げた。①「達成価値」。②「内発的価値」。③「道具的価値」。①は「目標やタスク(課題)の習得と達成から満足感が得られるかどうか」だ。例として「量的データの分析ができてレポートが書けた!」などを挙げた。②は「タスク(課題)を行うことそのものから満足感が得られるかどうか」。例としては「プログラミング自体が楽しい!」などを挙げた。③は「他の重要な目

標を達成する上で、その内容が役立つかどうか」だ。例としては「大学院での研究に応用できる！」などだ。参加者が熱心に講義を聞いていた。

ここで再び参加者に「期待価値理論と環境」の考えの中の授業の＜価値＞について、参加者が議論できるように問いかけが再度行なわれた。「文法はなぜ学ばなくてはいけないですか？」「対応を考えてみましょう」という訳で、参加者同士の短い討論となった。その上で栗田先生は「価値を高める方法」を4点挙げた。1「授業内容を学生の関心と結びつける」。2「将来における授業内の重要性を示す」。3「何に価値をおいているかを示し、それを評価する」。4「授業内容に対する情熱や意欲を示す」—だが、「日本語中・上級者などは、作文、論文を書くためには文法を理解するとメリットが多い」など栗田先生の助言もあり、ここでも先生方は、熱心にメモを取っていた。

◆授業価値を挙げるクラス環境などの重要性

講義の最終段階は「環境との関係性」だ。三度「モチベーションモデル」が画面に映し出され、＜環境＞について「モチベーション強化に影響 協力的な環境」の説明が吹きだして説明された。ここで大事なものは授業クラスの環境・雰囲気は「協力的環境であると、価値・期待との相互作用によってモチベーションが強化される」との指摘だ。ではその「協力的な環境を作る方法」は何かというと、①「シラバス（講義実施要綱）と初日の授業で雰囲気を確立すること。②「雰囲気に関してフィードバックを受ける」こと—の2点だ。

モチベーションの喚起・維持・向上に関し、「教授者にできること」、先生方にできることを3点挙げられた。1、「学生にとって高い価値を考える」。安きに流れてはいけない。2、「学生の期待を高める工夫をする」。3、「協力的な環境をつくりだす」。留学生同士が協力しあう、助け合うクラスの環境・雰囲気作りの大切さだ。

講義の仕上げは「クラスデザイン検討」だ。「モチベーションを向上させるという観点でクラスデザインを改善しましょう」が最終課題だ。ここでは先生方に「自分のクラスデザインの改善案を考えましょう」のテーマに5分。ペアで「クラスデザインの説明」に3分と「改善案を議論する」のに6分の計9分で、ペアの相手を4回変えて繰り返し議論し計36分とたっぷり時間をとった意見交換の場となった。最後にその内容を全員の前で発表し合って、出された意見が全体で共有された。

栗田先生が、向上心溢れる日本語学校の先生方に挙げた「参考文献」は、スーザン・A・アンブローズ、マイケル・W・ブリッジズ、ミケーレ・ディピエトロ、マーシャ・C・ロベット、マリー・K・ノーマンの5氏による共著で、栗田佳代子先生の訳書『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』（玉川大学出版部、2014年）だ。

◆「学習意欲を高めるためのクラスデザインの検討」—吉田壘・東大特任助教

次いで吉田先生の登壇となった。吉田先生の講座「学習意欲を高めるためのクラスデザインの検討」が、栗田先生と同様にプロジェクターを使ったスクリーンに映し出された。最初は「本研修の目的・目標」だが、「目的」は、栗田先生と同じ「モチベーションの理論の理解と活用を通してクラスデザインを改善する」こと。「目標」は、教育システムモデルの「ARCSモデル」を①説明出来る。②同モデルを用いて他者の授業の改善案を挙げられる。③自身の授業の改善案を挙げられる——の3点だ。

この「ARCSモデル」とは、アメリカの教育工学者・ジョン・M・ケラーフロリダ州立大学名誉教授が1983年に提唱したインストラクショナルデザイン（学習効果を高めるための教育設計）を手掛けるデザイナー（先生）を助ける実用性の高い教育支援モデルだ。

◆「ARCSモデル」形成の4カテゴリ要素「注意・関連性・自信・満足」

先ず「ARCSモデル」は、カテゴリとプロセスの2つからなる。カテゴリ（範疇。事柄の性質を区分する上での最も基本的な分類）は、①「Attention（注意）」、②「Relevance（関連性）」、③「Confidence（自信）」、④「Satisfaction（満足）」——の学習意欲の向上にとって大事な4要素から構成されている。お解りの様に4要素の英語の頭文字「ARCS」がモデル名の由来だ。

一方、プロセス（物事を進める手順）は、(1)「モチベーションの要素を知る」、(2)「生徒・学生の特徴を把握する」、(3)「モチベーションを高める」、(4)「教材・内容を決定する」、(5)「実施した結果を評価する」——の手順で進む。

そこで、カテゴリの4要素だが、①番目の「Attention（注意）」は「この学習経験を面白くするには、どうすればよいだろうか？」という最も基本で、最も大事な疑問に応える要素だ。それにはA知覚的喚起（Perceptual arousal）、B、探求心の喚起（Inquiry arousal）、C、変化性（Variability）——を促す工夫の重要性が指摘された。

例えば、Aでは、例として「アニメーション」の使用や「個人的エピソード」を語るなど「新しいアプローチや感情的要素により好奇心と驚嘆を創出」できるよう強調した。Bでは、「思考を促す問いかけ」「最新の研究テーマの紹介」など「問いかけ、矛盾を提示し、探求心を持たせる」工夫の必要性を指摘した。また、Cでは「口頭説明の間に入れる動画」や「多様な資料」を用いて「表現方法を変化させること」の重要性が強調された。

次に②番目の「Relevance (関連性)」だが、「この学習経験を学習者にとって意義深いものにさせるには、どうすればよいだろうか？」という疑問に応える重要な要素だ。これも、イ、目的指向性 (Goal orientation)、ロ、動機との一致 (Motive matching)、ハ、親しみやすさ (Familiarity) ——の3つの工夫が求められた。

イは、「学生に関係ある授業目的・目標の設定」の工夫で、吉田先生は、例として「授業内容が将来に役立つことを伝える」など学ぶ意義の明確化を求めている。ロは、「学生のニーズに合わせる」の工夫を先生方に求めており、「基礎問題だけでなく応用問題も提示する」などの例を挙げた。さらにハでは、「授業内容を学生の体験・知識とひも付けること」を重視し、「身近な具体例を提示する」ことや「実際の器具を見せる」などを例として挙げた。

◆留学生の自信獲得に大事な成功体験の積み重ねと満足感の付与

③番目の「Confidence (自信)」だが、これは「学習者 (日本語を学ぶ留学生)の成功に向けて工夫をするための手がかりをどのように盛り込めるだろうか？」という問いかけでもある。答えの1つ目は「学習要求 (Learning requirements)」だ。具体的には「到達目標およびその評価基準を提示し肯定的期待感と信頼を得る」ことが重要で、「到達目標及びその評価基準を提示し、肯定的期待感と信頼を得る」重要性が指摘された。2つ目は「成功の機会 (Success opportunities)」。「成功の経験を得られる機会を提供する」こと。例えば「課題へ取り組むスモールステップを提示する」などだ。つまり、最初から高い目標を掲げるのではなく、目標を細分化し、小さな目標を示してあげて、それを達成する成功体験を積み重ねながら、最終目標に導いてあげることが挙げられた。3つ目が「コントロールの個人化 (Personal control)」だ。例えば「課題の自己評価を促す」など「成功要因を自分に帰属させるようにすること」である。

留学生に「自信」をつけさせる最後のポイントは「満足 (Satisfaction)」感を与えることだ。「学習者がこの経験に満足し、さらに学び続けたい気持ちになるには何をしたらよいか？」ということだ。吉田先生は、それにはA、内的強化 (Intrinsic Reinforcement)、B、外的報酬 (Extrinsic Rewards)、C、公平さ (Equity) ——の3点が必要だと説かれた。

イの内的強化は「学ぶこと自体を楽しむようにサポートすること」で、「仮想ではなく、現実の事例・データ」の使用を挙げた。ロの外的報酬は「課題の達成に対して追加点・賞を与える」ことなど「学習に対して何かしらの報酬を提供すること」だ。ハの公平さは、「明確な評価基準を設け、それに従って評価する」などの「全員平等に公平に扱うこと」である。「依怙最良は禁物」だ。

最後に「公開レビュー」ということで、「モチベーションを向上させるという観点でクラスデザインを改善しましょう」と課題が与えられた。各自が「クラスデザインの会場の参加者が改善案を5分考える」ことが課せられ、「ARCSカテゴリ（注意・関連性・自信・満足）のどの部分が満たされているか、どの部分が満たされていないかを考える」という観点から各自考えた上で、グループ別に分かれて改善案を約8分間述べ合ったりした。

また、先生方同士が、互いの経験を活用しながらお互いの改善点を診断・評価する「ピアレビュー（相互評価）」も行われ、グループ別では4度対象を替えて改善案を議論しあい、結果も全員の前で発表して改善案を全員で共有した。

レビューでは、指導方法についての紹介や日ごろ教員が疑問を抱いていることなどの話し合いも行われた。ただし、「スクリーン上の場面展開が速く、重要か所のパソコンでの打ち込みがついていけない参加者」も見られ、講師陣の講義録を事前にプリントで読み込み、基礎体力を付ける必要性が感じられた。

吉田先生が最後に挙げた参考文献は、ガニエ氏などの共著、鈴木克明訳の『インストラクショナルデザインの原理』（北大路書房、2007年）と、ケラー氏などの共著、鈴木克明訳の『ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』（北大路書房、2010年）の2冊。

研修終了後は、会場を移して懇親会となり、参加者が交流を深めた。

◆「意見交換が改善策のきっかけ、学校に戻って伝えて欲しい」——若林副委員長

2日目の研修は、「授業以外での問題点や課題」について参加者の先生方による分科会方式で意見が交わされた後、各分科会から順次、問題点の指摘と解決策の発表があった。A1、A2からD1、D2まで8つに分かれた分科会の発表は多様で「電動アシスト自転車の違法性について」、「学費の滞納と教師の指導力の解決策」「給与面の解決が教師のモチベーションを上げるとの提案」、「地域へのゴミ捨て参加と教員の資質について」、「カンニングは厳しく零点にしている」、「携帯電話の使用から学生と教師の共通認識について」、「学生は教師が何でもしてくれることから、学生を甘やかしている面がある。しかし、厳しい教師の方が、教育効果があがる」など様々な報告が寄せられた。

最後に、研修会を締め括る若林副委員長からの総評が行なわれた。若林先生は「二日間の研修会は、さすが各学校の責任ある先生方の教育に対するモチベーションの高さを痛感いたしました。漢字圏から非漢字圏にまで及ぶ学生指導で先生方のご指導が大変であることは各学校共通しております。今回それぞれの学校での問題点が共有され意見交換できたことが、一つの改善策のきっかけとなることを願っております。反省点も多々ありますが、各学校で今回の結果を伝え

で欲しい。これを機に今後もこのような機会を作っていきたいと思っております」と次回の教員研修会開催も示す抱負が述べられた。

また教員研修会の閉幕にあたり、J a L S Aの荒木幹光理事長から「今回の研修会は、参加者からの感想や意見にもあったように有意義で、今後の先生方の指導法について効果的な研修会であった」と評価され、尽力された「教員研修実行委員会」の委員と事務局職員らに謝意と慰労の言葉が述べられた。